

永原 順子（大阪大学大学院 人文学研究科 日本学専攻）

## 1. 緒言

自然は人間に恵みをもたらすと同時に災害という脅威を内包する両義的存在である。特に「水」は不可欠な資源である一方、洪水や水難などの被害も引き起こす。このような水の両義性に対し、人びとは感謝と畏怖という複雑な感情を抱き、それを儀礼や信仰、伝承というかたちで表現してきた。本発表では、水域に関する信仰や伝承における災害との結びつき、また実体験を通して伝承が再活性化する過程を考察する。

## 2. 事例

一つ目の事例は、高知県南国市で毎年6月に行われる「エンコウ祭り」である（図1）。川辺に現れるとされる水の怪異・エンコウは、水難と豊漁の両面を持つ存在として語られてきた。調査時に、最近、川での事故から息子が助かったという体験をもつ男性が、エンコウへの感謝を表すために祈りを捧げていた。これは、個人的経験が地域の伝承と結びついたことによって、信仰が現在進行形で再び実感されている例である。



図1 エンコウ祭り準備作業の様子

二つ目の事例は、岡山県南部に伝わる「がきのくび（ぼんのくび）」という伝承で、8月16日に水辺に近づくときあの世に連れていかれるとされる。盆の送りとともに霊を水辺から送る観念と関わり、水難が他界への引き込みとして解釈されている。

また、補助的に、吉野水分神社の天水分大神信仰や、岡山神社の水神祭なども事例も挙げる。いずれも水の恵みに感謝しつつ、災いを鎮めようとする意識が背景にある。

## 3. 分析と考察

これらの事例から、水域は単なる危険地帯ではなく、異界との境界として認識されていることが分かる。水の怪異や死者の存在と結びつけて災害や事故を語ることで、地域社会に注意喚起の文化が形成されている。特に、現実の体験が伝承を呼び起こし、信仰が「生きた文化資源」として再構築されていく点は重要である。

また、水辺を他界への通路とする観念は、災害や事故を単なる偶発的出来事ではなく、霊的・宗教的意味を持つ出来事として受け止める人間の営みを示している。

## 4. 結言

本発表では、「エンコウ祭り」と「がきのくび」の事例を通して、水域に関する信仰が災害と結びつきつつ、死や他界への感受性を伴って文化的に表現されていることを明らかにした。特に、体験と伝承の再接続を通じて信仰が再活性化される構造は、伝承の現代的意義を理解するうえで示唆的である。災害を現在の行動に影響を与える文化的枠組みとしてとらえる視点は、防災教育にも資する可能性を持つ。

【謝辞】本研究は、株式会社 坂本技研との共同研究「学際的視点を持たせる地域連携教育研究」の成果によるものです。この場を借りて深く御礼申し上げます。